

南よりの風心地よし家ごとの祭提灯わづかにゆれる (R)

時を越えて繋がる・・・

西側に見える月山や葉山は夏でも見ているだけで涼しい気分にしてくれます。山形の猛暑は有名ですが、朝方は爽やかで朝露が降りていたりします。高い山から冷気が降りて来るのでしょうか。土用の丑の頃は百品の草を入れたお風呂に入り、夏バテしないようにと、ドジョウを食べました。豆腐やネギを入れた“どんじょ(ドジョウ)汁”や“卵どんじょ(ドジョウ)”の料理にしました。どちらにも笹搔き牛蒡を入れました。(幼児語ではどんき?)

なかなか手に入らないうなぎは高級品で、その効果は病み上がりの方には絶大です。歌人の齋藤茂吉先生も大のうなぎ好きでした。昭和二十一年一月三十日から二十二年十一月三日まで聴禽書屋と命名した二藤部宅の離れに疎開され、短い期間でしたが、大病を患い、戦争の疲れを癒し、歌集『白き山』を編まれるまでに回復されました。先生が大石田を「第二の故郷」と言ってくださった背景には、先生を慕った大石田の人々とのあたたかい交流があったからです。『茂吉の体臭』齋藤茂太／著の中で著者はこの町の方々に感謝し、真綿のように、軟らかく暖かいと書いてくださいました。図書室の窓からは大石田小学校のスローガンが見え、「あたたかく」「つよく」「やわらかく」と。今でもこの土地は茂吉先生と繋がっています。乗船寺境内に茂吉先生のお墓があり、北側には芭蕉の『おくのほそ道』を追いかけて明治二十六年八月七日大石田に一泊した正岡子規の『ずんずんと夏を流すや最上川』の文学碑があります。

桐始めて花を結ぶ(きりはじめてはなをむすぶ) 7月22日～7月27日頃

夏休みは朝ラジオ体操から始まった。神社の境内に集まり、6年生が前に立ち毎日みんなで行った。出席カードに判を押してもらい、休まず出席すると鉛筆が何かご褒美があった記憶がある。境内は勉強の場所にもなり、『夏休みの友』などの宿題をやったりみんなで行った。本当に神様がいるのかと神社の中をのぞいてみたり…。(れ)

土潤いて溽し暑し(つちうるおいてむしあつし) 7月28日～8月1日頃

夏休みに入ると地区ごとに朧気川上流に水浴びに行っていました。上級生が旗を持って下級生を導きながら、田んぼのあぜや土手を通して歩いていきます。川をせき止めたプールのように、それはそれほどこまでも透き通っていて、ちっちゃな雑魚(ざっこ)と一緒にプクプク浮いているだけのはるか遠い夏休みの思い出です。(と)

大雨時行る(たいうときどきふる)

8月2日～8月6日頃

蝉は未明に蛹(さなぎ)から成虫になる。そして外敵から身を守る為に必ず移動する。夏は毎日が蝉取りだ。空蝉(せみがら)を見つけたら手で握り湿り具合で移動した場所を判断する。捕えた蝉は胸にとまらせ、まるで勲章だ。油蝉を次年子・長瀨では「ぎっとる」と呼ぶ。それはアイヌ語で「虫」との意味がある。(海藤忠男)



2014.7.26 小平沼

読書会だより ②4

大石田七十二候読書会・大石田町立図書館

大石田の大暑のころ

七十二候より

日中は真夏日が続く日々ですね。昔、置き薬の薬屋さんからいただいた食べ合わせの悪い表に「うなぎと梅干」「天麩羅とアイスクリーム」「スイカと天麩羅」が載っていた記憶があります。「なして(どうして)、ほんて(本当)？」と何度も母に聞きくと、「ほだなごとより、生水さ気を付ける。」と叱られました。親の意見と茄子の花は千に一つも無駄がないとか。